

<姫路城が攻撃されるまで>

# 姫路藩勤王党

明治18(1885)年、日本で初めて内閣が設置されました。その初代総理大臣はいまさらいうまでもなく伊藤博文で、この第一次伊藤内閣で司法大臣を務めたのが山田顕義でした。伊藤や大久保利通らに比べると知名度は落ちますが、山田も伊藤と同じく松下村塾に学び、官軍を率いて箱館戦争に至るまで各地を転戦した人物でした。もちろん、明治政府では長州閥の一角を占め、元老の一人に数えられる地位にありました。

そんな彼と姫路が関係する新聞記事を紹介してみます。

明治25年11月13日、「神戸又新日報」は、「山田伯の薨去」として山田顕義が11日に生野山山視察中に急死したことを報じ、その記事は「何にしても国家の元老を生野の逆旅に失ひしは実に千載の恨事にして畏けれども天皇陛下の御宸悼のほどさこそ恐察し奉るなり」と結ばれるほどでした。

そのような政治家が兵庫県に来ているわけですから、地元の新報が、死亡するまで山田の来県を報じないわけがありません。同年11月11日、同紙は山田が姫路に来たことを報じています。それによると、彼は山口から東京に戻る途中で、9日に尾道から姫路に着くと、西魚町の井上楼に投宿。翌朝、姫路停車場から生野に向かっていました。結核の病歴があるうえに数日来風邪で体調が悪く「余所目にも殊に苦しげに見江しかど」、無理を押してのスケジュール消化が死期を早めてしまったようです。

ちなみに、山田の遺骸は姫路に送られて、ひとまず西呉服町の大庭寛一宅に安置されました。棺桶は姫路で作ることになり、檜の節なし一枚板で作られ、白綸子で蔽われました。また、鉄道庁は彼の遺骸と付添人を東京へ搬送するために、上等・中等客車1両ずつを姫路に回送することを指示。しかし実際に搬送する段になって、棺が大きく客車の入口から車内に積み込めないで、仕方なくブレーキバン(車掌が乗降するデッキのことか)に積載されることになったそうです。

山田が姫路に宿泊したのは旅程の都合とみられますが、ただそれだけでもありませんでした。山田が死んだその日の早朝、彼は体調不良にもかかわらず坂田町にある善導寺に行きました。それは、河合惣兵衛の墳墓に参詣するためだったというのです。

山田が姫路に着いた時及び生野への出発時には「同地の裁判所判検事を始め他の重なる官吏等何れも送迎した」というほどですから、司法関係者以外の随行者も含めば大勢の人たちが善導寺への参詣に同行したことでしょう。

河合惣兵衛は、長州出身の元老にとっても無視することのできない人物として認識されていたことが推察されます。

「神戸又新日報」に掲載された山田顕義



<『神戸又新日報』については姫路市史編集室所蔵のマイクロを利用した>

河合惣兵衛とは河合宗元(文化13~元治元年)のことで、酒井家の家老河合氏の傍流の家系になります。彼は家老河合道臣(寸翁)が設立した仁寿山校での教学に影響を受けて国学へ傾倒していったと言われます。

時節柄、姫路藩でも尊王攘夷運動が高まりをみせます。そうした運動に傾倒する人々によっていわゆる勤王党と呼ばれる一派が生まれました。そうした動きが活発になるのは、文久元(1862)年、軍勢を率いて上京する島津久光が室津に上陸し、この時、久光へ意見しようとする武士らが姫路や室津に集結したことも無関係ではないようです。また翌年には、姫路藩は京都所司代酒井忠義とともに京都の警衛にあたることになり、境野求馬に率いられた人数が上京しました(河合宗元もその一員)。この時、京都において同じ主義主張をもつ他藩の藩士らと通交するようになったようです。

宗元らは京都で久坂玄瑞や桂小五郎などの長州藩士とも交流し、そうした関係から酒井忠義(京都で「安政の大獄」を指揮)は奸曲だから協力することは無用と忠績に対して諫言しました(松本静吾編『姫路紀要』1912)。しかし、酒井家は中世以来徳川家と共に重ねてきた歴史を誇示することで「家」の貴種性やプライドを維持してきたこと、当時藩主であった忠績は幕閣で重要な位置を占めていたため、保守的な立場を崩そうとはしませんでした。かえって保守派の商人暗殺や藩士の出奔など、過激になってくる勤王党の動きは、藩主や保守派にとっては差障りとなってきました。また、八月十八日政変で長州藩が京都から追放されたことも追風となったのか、河合宗貞が出奔すると、養父宗元は禁固処分とされました。宗貞の実父境野求馬は藩主への直諫の上書を認め、自殺しました。宗貞も長州へ逃げる途中に捕縛されました。この時、勤王党による暗殺事件などに加担した藩士もことごとく捕縛され、備前門内の牢舎に投獄されました。家老河合良翰も江戸で幽閉されています(元治元年)。

藩の取り調べは激烈を極め、河合宗貞は訊問に対しても「貴公等に天下のことが何が判らう」と答えず、算盤責で肉破れ骨が砕けて気絶することがあっても文天祥の正気歌を朗吟するのみであったといいます(橋本政次『姫路城史』)。その養父河合宗元にいたっては責任が他の藩士に及ぶことを危惧して、すべて自分の指揮下で行われたと主張し他の同志の赦免を訴えたそうですが、宗元は自刃、宗貞は斬罪、その他の藩士も重刑を科せられました(「甲子の獄」)。

山田顕義は文久3年の八月十八日政変のとき、三条実美らに随行し長州へ逃れていますので、この直前に、京都で河合らと接触があったことが容易に想像できます。山田が体調不良をおしてまで参詣するほどですから、彼にとって河合はまさに「同志」に相応しい人物だったのかもしれない。

幕末から明治維新にいたる変化の時期を、河合のような人物を通して見ると、「日本史」では語られない姫路地域の近代史が見えてくるかもしれません。

河合惣兵衛の顕彰碑は「外濠公園」(姫路市神屋町)に、河合家の墓所は善導寺(姫路市坂田町)にある。



河合惣兵衛の顕彰碑。碑の背後は姫路城外堀跡



河合家屋敷跡近くに架かる橋の名は「河合橋」



"Shiro Fumi" No.51 The News of Himeji Center for Research into Castles and Fortifications.